

## <随想>松田修先生との思い出

著者	加藤 良輔
雑誌名	日本文学誌要
巻	49
ページ	94-95
発行年	1994-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019730">http://hdl.handle.net/10114/00019730</a>

## 松田修先生との思い出

加藤 良輔

私が松田修先生に指導していただいたのは大学院に入学してからです。口述試験の折、私の筆記試験の成績を見ながら開口一番、「君は基礎ができていないね」と引導を渡されて以来もう五年になります。いつまでたっても成長しない学生だとあきれておられるのではないでしょうか。一度、先生の著作の校正を依頼された時など、人名や書名を一々確認しなければならない無学者はふた月もかかってなんとかお渡し出来たというありさまでした。ゼミで『伽婢子』の一話を担当した時には、「北条九代」という一語の解釈に先生がヨシといわれるまで一年以上もかけてしまったという事もありました。

古今東西の文学は言うに及ばず、その知の触手のおもむかざる所無きが如き松田先生ですから学生が行き詰まった時には色々な参考図書の名をあげて別のアプローチもあることを示されます。私など

一体何世よみがえればあれほどの蓄積が出来、そして記憶の棚からたちまちのうちに引き出してこれるものなのか、いつも目と口を開けっ放しにさせられています。しかしせっかく碩学が目の前でホホ笑まれているのなら、こちらはその脳髓をしゃぶりつくし、味わいつくさねばなりません。サンカ（山窩）とよばれる人達について調べている旨をお話すると、「マジナル」誌上に論文を発表され、サンカ研究会に参加された事もある由。そのサンカ研究会には私もお伴させていただいたりしました。もっともその時は作家・中上健次氏が亡くなった直後で、同氏夫人であり紀和鏡の筆名で小説も書かれている会の中心人物の一人、かすみさんを励ます会であり、通常の研究会ではなかったのですが……。

昨年、筒井康隆氏の断筆宣言が世上をにぎわせていた頃には以下のような先生とのやりとりがあったと記憶しています。筒井氏が筆を折ることを決意せざるをえない所にまで追いこまれた、その社会や、マスコミのあり方という大問題を取りあえず傍らに置いてみたときに、彼は真実、社会に向かってそれほどの毒を吐いていたのか、それは自らに向けられた自虐の毒であり、ことさらな偽悪・露悪の姿勢があっただけではないのか、関係というものをまず捨てるところからはじまっている彼の作品は悪の強さ・怖さを描いていたのだろうか、といった考えを私は述べました。先生は『村井長庵』などには社会に対する悪や毒が描かれているのではないか、読んでごらんさいとおっしゃいました。『村井長庵』を知らなかった私は、読後、再度感想を述べました。碩学に対して少しでもくらいつかねば、非礼に価するでしょう。権力の捕縛から逃げ続けながら逃亡先の島では自らが権力となって弱者から収奪し、抱きたい女はものに

出来ずに精液の放出のためにのみ老若男女の島民を強姦し続ける、この駄々子の如き村井長庵には、作家のある種のいらだちは感じられこそすれ、少しも怖くない。それは社会や関係を捨てたところには悪は存在し得ないからではないでしょうか。荒野でイエスと出会わなかったとして、それでも悪魔は悪魔たりうるのでしょうか。先生は私のこうした暴論も面白がってくださいました。「村井長庵なんか怖くない」という題でエッセイでも書いたらどうですか、と多少揶揄気味におっしゃったと思います。こうしたゼミ終了後の雑談がいつも面白く為になったと書けば、先生は困惑されるでしょうか。

先生のもとに集まった松田ゼミの構成員はまったく種々雑多な指向性をもった人々でした。各人の研究しているジャンルも読本や仮名草子といった散文から俳諧、狂詩、歌舞伎、落語、浮世絵等々まで、よくいえば近世文化全般にわたる幅広さといえなくもない雑駁さです。こうした人達がお茶を飲みながらの雑談になると、さらに映画や演劇、音楽、漫画と拡大された怪気炎を吐き続けるのです。小ぶりの梁山泊に化したかと思われる研究室での茶話会において、はじめは先輩方の勢いに気押されていた私も漸く放言をするようになります。「つげ義春は好きでずっと読んできました。」先生曰く「丸尾末広や花輪和一は面白いけれども、つげは気味が悪いですね。」——「美空ひばりは昭和四〇年代の絶頂期を過ぎ、五〇年代はムクんだような顔でしたが、病床から復帰してから亡くなるまでの六〇年代は若い頃と異なった透き通るような美しさがあり、再びよくなったのではないのでしょうか。」先生曰く「ほう、それは平岡正明さんに聞かせたいですね。」——「『地獄の黙示録』でマローン・ブランド演じるカーツ大佐が殺される時に牛の首を切り落とす儀式とカッ

ト・バックになるのは、そこに神話的意味が付与されているのでしょうか。」先生曰く「あれには簡単な種明しがあるんです。大佐の机の上にフレイザーの『金枝篇』が置いてあるのです。つまり彼は「屠られる王」なんです。」——「上野の松坂屋の近くに上野文庫という古本屋があつて、サンカや落語の本がいっぱいあるおもしろい店ですよ。」先生曰く「中川さんのお店ですね。彼が以前に歌集を出版した時に頼まれて序文を書いた事があります。」「ええっ……まるで祇尊掌中の猿みたようなものです。」

与えられた題が「思い出」であるとはいえ、あまりに私的に過ぎた内容になってしまいました。私にとって松田修体験が未だ過去のものではなく、客観性という濾紙をとおせなかった故でしょう。先生の書かれた多くの文章から得た様々なものについても、今は書く余裕がありません。さしあたって一つ挙げるとするなら、歴史意識と漠然といえるものがあります。それは文学史に限定されるようなものではなく、例えば『複眼の視座』に収められた文章群の如く、歴史学に対して刺激的な日本論でもありえると思います。柳田國男の民族学が文字による歴史学に対するアンチ・テーゼとしての柳田史学でもあったことを私は考えています。

私の「松田修先生との思い出」は、ソコニ松田先生が居ラレタコト以外にはありません。その至福の時を私は味わい尽くしてこれたのでしょうか。私は未だ、しゃぶりすすりつくしてはいないのです。

(かとう りょうすけ・一九九三年大学院修士修了)